

今の世界を眺めて

岐阜市立藍川中学校 3年

梶谷夏帆(ますや なつほ)

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、中国のゼロコロナ政策、北京オリンピック開幕時に問われた人権問題など、今世界には様々な人権に関わるニュースが飛び交っています。

特にウクライナ情勢についての映像を見るたびに、私は複雑な気持ちになり、息苦しい感覚に陥ります。それは、ウクライナから避難してきた人たち、家族を失った人たちの気持ちを考えるから、そして、どうにか彼らを救う方法はないか考えるからです。でも、それだけではありません。ロシアという国のイメージが悪くなるのではないかという心配があるからです。実際に、日本の中でロシア人の方が誹謗中傷された、という話も聞いたことがあります。なぜ私が侵攻するロシアのことを考えるのか。それにはわけがあります。

私は小学生の時、テレビで北方領土に関するニュースを見ました。家族にどういうことか尋ねると丁寧に説明してくれたのですが、その話を聴いて私はロシアに対して悪いイメージしか持てませんでした。しかし、中学生になってある漫画に出会ったことで、私の中のロシアのイメージが大きく変わるという出来事があったからです。ロシアは歴史ある世界最大の国で、世界遺産が世界で9番目に多い素晴らしいところもたくさんある国だと分かりました。そのとき、どんな国も、100%いい国だとか悪い国だとか、決めつけられないほうがいいということに気付いたので。だから、ウクライナもいい国だし、多くの人が亡くなることに対しては怒りや悲しみを覚えますが、ロシアにもよいところはあるということも忘れてはならないと思うのです。

北京での冬のオリンピック開幕の際にニュースで話題になった人権問題の時にも同じこと思いました。この問題がテレビで流れた時、「中国は悪い国」と言っていた人がいました。確かに、人権問題は世界的な課題です。しかし、この問題一つだけで国の全てを判断してしまってよいのでしょうか。そんな決めつけをしてしまうことも、世界の人々による中国への人権問題と言えないでしょうか。社会科の学習で、中国は「世界の工場」と呼ばれていることを学びました。人口も多く、長い歴史を持つ国です。私たち日本人の生き方や考え方にも大きな影響を与えた国でもあります。国は人がつくります。完璧な人などいません。良いところも悪いところもあるはずで、そんな、人がつくった国には良いところも悪いところもあるはずなのです。

私は今年、3年生の国語で「握手」という物語を学習しました。その中でルロイ修道士が「日本人とかカナダ人とかアメリカ人というものがあると信じてはいけない、一人一人の人間がいる。それだけのこと。」と言っています。この言葉を初めて読んだとき、本当にその通りだと思いました。肌や目の色などの見た目や一つの行為だけでまるでその国の人全員がそうであるかのように決めつけて考えることが私は嫌です。何人、ではなく「その人」を見るというルロイ修道士の言葉は、すごく気持ちよかったです。

「その人」一人をよく見ていいところも悪いところも知る。そしてどう付き合っていくか考えることも、人権を考えることにつながるのではないのでしょうか。私の周りには、ロシアやウクライナ、中国の人はいません。でも、いつか出会うかもしれませんし、深く関わることもあるかもしれません。そんな時、私は「その人」自身をよく見られる人になりたいと思います。そのために、今、家庭や地域、学校で出会う人たちと関わることを大切にしたいと思います。たくさん話すこと、一緒に活動することで分かる相手の良さがあります。もしかしたら疑問に思うことがあるかもしれませんが、でも「この人はこんな人」と決めつけてしまわず、他のところに目を向けていきたいです。そして、相手を見ることを通して自分自身を見つめることもできるようになりたいと思います。相手を批判的に見る前に、自分はできているのか、できていないならどうしたらできるようになるのかを考えたいです。そうすることできっと、相手のことも自分のことも認め合えるようになるのではないかと思います。

世界中の国が、お互いを認め合えるように、まずは私から行動に移していきます。